

## 「産み」と「死」についての覚え書き:「弔い」を手掛かりに 「産み」の哲学に向けて(2)

居永正宏\*

### はじめに

筆者は「産み」の哲学を構築するべく考察を重ねているが、その中で浮かび上がってきた一つの主題が、「産み」と「死」の関連である。産みについて哲学的な考察を進めていくと、私たちの生において一見産みの反対側にある死が、産みの概念および営みの中に内面的に入り込んでいるように思われるのである。筆者は以前、「産みという営みが最終的に目指すのは、この世界を引き継ぐものに「あとはよろしく」と言って死ぬことができる、ということではないか」(居永2014, 103)と述べた。それは、長らく「死」を哲学的考察の主題としてきた筆者が、「産み」へと考察の主題を移して抱いた直観である。本論文は、この「産み」と「死」の内的関連についての哲学的覚え書である。

### 1 「産み」と「死」を関連させて考える

そもそも「産み」の哲学的な考察に関する先行研究が乏しい中で、「産み」と「死」を関連させて論じている先行研究はさらに少ない。筆者がわずかに確認できた範囲では、Held (1989)と Stone (2010)の論文2本が挙げられる<sup>1</sup>。この両者が産みと死を関連させる仕方と対照することで、筆者が考えるそれを提示したい。

Held (1989)の論点は、哲学が伝統的に死を人間的なものとして捉えてきた一方で、産み (birth) が生物学的なものとしてその下に置かれ、さらに男性を前者に、女性を後者に対応させてきたことに対する批判である。Held は、「私は、産む人 (a human being giving birth) が、死にゆく人 (a human being dying) と同じように、優れて人間的な出来事に関わっていると理解されるはずだということを示したい」(ibid., 363)と述べるように、産みを死と並ぶ人間的なものとして解釈することで、産みの従属的位置を引き上げようとする。そのやり方は、人間的なものの特徴として Held が挙げる 3 つの属性、選択 (choice)、意識的自覚

\* 日本学術振興会特別研究員 PD (関西大学文学部)。

<sup>1</sup> 筆者は「産み」の英訳を procreation とするが、この先行研究は両者とも birth を用いている。以下翻訳は「産み」、「誕生」、「出生」などを文脈に応じて使い分け、適宜原語を示す。誕生と産みの違いについては次節参照。

(conscious awareness)、想像的表象 (imaginative representation) が、死だけではなく産みにも当てはまることを示すというものである。私たちは死を自ら選択できると考え、またそれを意識的に自覚しており、その上で死についての様々な物語、絵画、儀式などが存在する。それと同じように、産みに関しても、それが意識的に選択および自覚され、それに基づいて様々な文化的表象が生みだされうる、と Held は言う。それによって、死と同じように、もしくはそれ以上に、産みが人間的なものとして把握されるという。そこから引き出されるのが、産みの一つの特徴であるケアの重要性であり、議論は所謂「ケアの倫理」の提唱で結ばれる。

さて、この Held の論文において、産みと死の関連はどのように捉えられているだろうか。一言で言えば、Held は両者の内的関連を明らかにするのではなく、「(女性的とされてきた) 産み」と「(男性的とされてきた) 死」が別々に理解されるという前提を受け入れた上で、両者を並列してそれぞれ同じように人間的なものであると主張しているに過ぎない。もちろん、産みにケアの側面が内在していること、またケアの倫理が重要であることは論を俟たない。しかし、産みにケアの側面があり、それが人間的に重要な側面であることを主張するのに、死との対比が概念的に要請されるわけではない。それを示すように、産みとケアを重視する Held は、他方の死に関してはほとんど理論的な展開を示すことなく、単に産みと事実的に対比するに留まっている。

次に Stone (2010) である。この論文は、ハンナ・アーレントの思想を引き継ぐイタリアの哲学者 Adrianna Cavarero による誕生と死の議論を批判的に参照しながら、独自の死の理解を提示しようとするものである。Stone によれば、「Cavarero は、出生性 (natailty) を、私たちの母の身体からの物質的な出生という条件として再解釈する…」(ibid., 355)。つまり Cavarero は、アーレントの『人間の条件』で言われる「第一の誕生」と「第二の誕生」を重ね合わせ、誕生とは無からの誕生ではなく、また非身体的な次元での「活動的世界」への現れでもなく、母の身体からの世界への誕生である、と主張している。その上で Cavarero は、それを反転させて死に当てはめる。「誕生 (birth) とは、無からの出現ではなく、誰かから存在へと来ることなのだから、同じように、死も虚無化 (annihilation) や非存在への移行ではなく、新しい物質的形式 (new bodily form) への移行である」(ibid., 358, 強調原文)。Stone はそれを、「個人を超えた宇宙的生命の循環 (circles of super-individual, cosmic life)」(ibid.) と表現する。そしてこのような死の理解によれば、私たちには死を恐れる理由がないと Cavarero は主張している、と Stone はまとめている。

この誕生と死の対称性自体は——是非はともかく——理解しやすい。しかし Stone は、この死の理解は Cavarero 自身の議論と矛盾していると指摘する。

Cavarero は別のところで、私たちは「関係的存在 (relational being)」であると主張している。それは要するに、私は他者との関係においてのみ私でありうるという主張である。そして、母からの誕生によって私はその関係のネットワークの中に入る。そうだとすれば、私が死によって何か別の物質的形式に変容するのだとしても、少なくともそれによって私がこの生で築き上げた関係性は断ち切られるのであり、その意味でやはり死は恐るべきものではないのか、と Stone は反論するのである。

Stone の議論をまとめると、次のようになる。

	誕生	死
「伝統的」見解	無からの出現	虚無化
アーレント	世界への現れ(「第二の誕生」)	?
Cavarero	母からの身体的出生	新しい物質的形式への移行
Stone	ユニークな関係性の始まり	ユニークな関係性の終わり

このように、Stone は誕生と死を対称的に位置づけ、一方のあり方が他方のあり方の正反対となるように理解している。このような誕生（産み）と死の対称性は、それが虚無、物質、関係性のどの次元で成り立つのかについての意見の相違はあるにせよ、それを議論する枠組みとして、一定の有効性を持つだろう。だが誕生と死の関係について言えば、この Stone のような議論の枠組みは、単に両者が私たちの生の両極にあって対称的なあり方をしているということ为前提として置いているだけであり、両者の内的関連を明らかにしようとするものではない。

この Stone の議論の仕方から筆者が連想するのは、善の反対が悪であり、逆もまた然りであると考えられるような、素朴な（倫理的）議論である。しかし哲学的思考とは、善の中に悪があり、悪の中に善があるというような、善と悪の絡み合いを解きほぐすところにある。同じように、産みと死についても、産みの中に死があり、死の中に産みがあるような、産みと死の絡み合いを明らかにすることにこそ、産みの哲学的探求の意義があるように思われる。

では、ここで見た二つの論文のように、産み（誕生）と死について、哲学的伝統における死の強迫観念を批判して産みにおけるケアの重要性を主張する (Held) のではなく、また誕生と死を別々に存在する対称的なものとして前提する (Stone) のでもない、産みと死の内的関連の探求はいかにして可能なのだろうか。次に、その手掛かりとなる、「産み」と「死」の三つの次元という視点を導入したい。

## 2 「産み」と「死」の三つの次元

ここで示す「産み」と「死」の三つの次元というアイデアは、先の Stone の論文で示された誕生と死の様々な捉え方が、実際はそれぞれ排他的なものではなく、誕生と死が複数の次元を有しているということを示しているのではないかと、という着想に基づいている。

まず「産み」について。なによりもまず、産みとはやはり母の身体による子供の身体の分娩としての、生物学的な出生である。これが産みの第一の次元である。次に、森岡（2014）が指摘するように、一種の独在的な「私の誕生」が産みには結びついているように思われる。「（私の）誕生」と「産み」は徹頭徹尾別次元の出来事であり、けっして交わらないようにも思われるのだが、しかし同時に、その二つは何かの形で互いに同定されている」（*ibid.*, 129）。このような意味での私の誕生が、所謂「無からの出現」としての誕生という考え方に結びついている。これを、順番が前後するが、産みの第三の次元とする。最後に、産みの第二の次元は、上の二つの次元を除いた、いわば狭義の「産み」である。それは、絶対的に異なるはずの二者が、産むものと産まれるもの、親 - 子という形で繋がっているという法外なあり方である。以前筆者は、産みの哲学は、産まれることではなく産むことをまず主題とするべきだと主張したが、この第二の次元はこの産むものの視点からこそ捉えられるように思われる。そしてこれは、第一の生物学的な次元と第三の独在的な次元の間であって両者を繋ぐ、産みの中心的次元である。

産みの三つの次元をまとめると次のようになる。

- A. 生物学的出生
- B. 狭義の産み（親 - 子の法外な二元性）
- C. 独在的な「私」の誕生

これに対応して、死にも三つの次元が考えられる。第一が、生物学的な出生に対応した、生物学的な意味での死である。特に説明は要らないだろう。次に、また先に第三の次元になるが、独在的な私の誕生に対応する、「私の死」がある。これは、他者と共有できない、私に固有の不可能性の可能性としてハイデガーが示そうとした死と重なる。これは、生物学的な意味での私の身体の死とは異なるもので、独在的存在としての「私」の消滅と言い換えてもよい。そして最後に、両者の間であって、狭義の産みに対応すると筆者に思われるのが、「吊い」という第二の次元である。もし私と他者が絶対的に違うものならば、その他者（もしくは私自身）が死者になってしまっても、もともと絶対的に違うものなのだから、それが死によってそれ以上違うものになるということはないはずで

ある。その場合、そこに敢えて弔いという契機が入り込む余地はない。しかしそうではないからこそ、即ち生きている他者とは絶対的な他者ではなく、私と共に生命と世界を共有している他者だからこそ、死において、それを弔うという契機が立ち上がってくる。しかもそれは、その他者（もしくは私自身）が死という絶対的な断絶の向こう側に行ったところで立ち上がってくるのである。それは、狭義の産みと同じく弔いにおいても、私と他者の法外な二元性が立ち現れていることを示している。

産みの三つの次元と合わせて、死の三つの次元をまとめると次のようになる。

産みの三つの次元	死の三つの次元
A. 生物学的出生	a. 生物学的死亡
B. 狭義の産み(親 - 子の法外な二元性)	b. 弔い(生者 - 死者の法外な二元性)
C. 独在的な「私」の誕生	c. 独在的な「私」の消滅

さて、この産みと死の三つの次元を対応させて考えてみると、第一(Aa)と第三(Cc)の次元と、第二の次元(Bb)には、一つの違いがあるように思われるのである。それは、AaとCcにおいては、産みと死の間に概念的繋がりはなく、切り離して考えうるのに対して、Bbは概念的に切り離すことのできない、内的に関連した表裏一体のものではないのか、ということである。

生物学的な出生(A)と死亡(a)は、もちろん生物学的には表裏一体のものである。「有性生殖によって死が生まれた」と言われるように、産みを可能にするヒトの生殖形態と生物学的死は密接に繋がっている。しかし、概念的に言えば、生物学的に出生した人間が永遠に生きること(死なないこと)は、矛盾を孕んでいるわけではない。その意味においては、生物学的な出生と死亡は切り離すことができる。また独在的な「私」の誕生(C)と消滅(c)についても、誕生した「私」が必ず消滅しなければならないという概念的必然性はない。実際、独在的な「私」の消滅とは、独在的な「私」に内在したものではなく、本来そのような「私」とは水準を異にするはずの私の身体の生物学的死亡という経験的な可能性に重ね合せて想定されているに過ぎない。

一方で、狭義の産み(B)と弔い(b)は、そのように切り離すことができないのではないか、というのが筆者の考えである。もちろん、日常的な意味では、私が子供を産むこと(もしくは私が産まれること)と、誰かが亡くなってそれを弔うこと(もしくは弔われること)は、別々の経験であり、両者が関連しているとは思われない。しかし産みと弔いは、共に「親 - 子(産むものと産まれるもの)」と「生者 - 死者(弔うものと弔われるもの)」という法外な二元性を内蔵しているという点で、実は内的に関連しているのではないかと思われるの

である。先走って言えば、この二つの法外な二元性は、別のものではないのではないか、というのが筆者の直観なのである。節を改めてそれを提示したい。

### 3 「産み」と「弔い」の内的関連

筆者が考える「産み」と「弔い」の内的関連を示す手掛かりとして、以前の論文で試みた産みと死に関する思考実験と、それに対する森岡（2014）のコメントを参照したい。その思考実験は、「産み」が他者関係一般とは異なる点、それは、そこで産まれたものが私の死後に生きていくということである、…」（*ibid.*, 102）という筆者の主張を換言した、次のようなものであった。

例えば、世界が永遠に生きる（もしくは寿命の長い）種族と、そこから生物学的に「産まれる」、寿命のある（もしくは短い）種族の二つに分かれているとしよう。当然、前者は後者よりも長く生き、後者は前者よりも早く死ぬ。そのとき、前者は後者を優れた意味で「産んでいる」と言えるのだろうか。死と産みを接続する視点から言えば、前者は後者を優れた意味で産んでいるとは言えず、そこに産みという営みは成り立っていない、ということになる。…つまり、自分が「産んだ」ものが必ず自分の生きている間に死に、私が必ずその生の終わりを見届けてしまうのだとすれば、それは「産み」の営みだとは言えないのではないか。（居永 2014, 103）

これに対して、森岡（2014）が二点指摘している。一点目は、ある女性が産む子供には、必ず一年以内に死んでしまう遺伝的疾患がある場合でも、その子供を出産することはやはり「産み」ではないのか、というものである（*ibid.*, 124）。確かに常識的な感覚からすれば、そうである。しかし、「あるバッターが必ず三振してしまう」としても、そのバッターは野球を行なっているとは言えても、「あらゆるバッターが必ず三振してしまう」ようなゲームは野球ではないのと同じように、その女性が一年以内に死んでしまう子供を産むことと、あらゆる産みの営みがそうである場合とは、分けて考えるべきではないだろうか。もしあらゆる産みにおいて、その子供が一年以内（もしくは長くても親が生きている間に）死んでしまうとすれば、そもそも「産み」という営みが成り立たないのであり、翻って、森岡の言うその女性の営みも「産み」として理解されることはないと思われる。その意味で、森岡の指摘に対しては、「もちろんその女性の営みは産みに含まれるが、それは基本的に自らの死後に生きていくものを産むという広い営みの中にあるからこそそうなのである」と答えられる。

本論文の主旨に密接な関連があるのは、森岡の指摘の第二点目である。それは、

永遠に生きる女性が次々に子供を産むが、その子供たちには寿命があるのでその女性よりも先に死んでしまうとしても、それはやはり産みではないのか、というものである。なぜなら、「ここで問題を生み出しているのは、女性が「死ねない」ことなのであり、決して子どもが「先に死ぬ」ことではないからである」(ibid., 125)と森岡は言う。おそらくここで森岡が言いたいのは、産んだ側に寿命があるのか永遠の命を持つのかに関係なく、そこから「産まれた」ものがある以上、産みは成り立っているのではないか、ということであろう。しかし、そうではないと筆者には思える。まさにその女性が死ねないからこそ、そこに産みはないのではないか、というのが筆者の直観だからである。これを前節で示した産みと死の第二の次元(Bb)に換言すれば次のようになる。即ち、(狭義の)産み(B)とは、自らが産んだものによって吊られること(b)によって完結する営みなのではないか。また逆に言えば、自らを産んだもの(B)を吊る(b)ことが吊いの本義なのではないか。さらに言えば、私が誰かを吊うことは、その吊われる誰かを「私を産んだもの」にすることであり、逆に、誰かに吊われるとは、私を吊うその誰かを「私が産んだもの」にするということではないのか。そして、このような「産み - 吊い」の可能性の条件として、産むものが死ぬこと、しかも自らが産んだものよりも先に死ぬことが本質的ではないのだろうか。

もちろん、現実には自らより先に死んでしまった子供を親が吊うことはある。しかしそれは、先の生後一年以内に死んでしまう子供の例と同じように、吊いとは即ち自らの子供の死を吊うことである、という結論を導くわけではない。必ず子供が先に死んでしまう世界においては、その子供を悼む営みは私たちの世界と全く異なる意味をもつはずである。それはここで産みと表裏一体にあると論じている吊いとは全く別物だろう。私たちの世界においては、吊いとは第一義的に自らを産んだものを吊うことであり、その中においてのみ、親による子供の「吊い」も成り立っているのではないか。

このような意味で、筆者には産みと吊いが内的に関連していると思われる。それを前節の最後で述べた「親 - 子 (産むものと産まれるもの)」と「生者 - 死者 (吊うものと吊われるもの)」という二つの法外な二元性の交差という形で図式的に表せば以下のようなになる。

私は親の子供として生まれ、またやがて子供を産んで親となる。それは、「親 - (産み) - 私 (子供／親) - (産み) - 子供」と表せる。また、私は生者として死者を吊い、また私が死者となれば生者によって吊われる。それは、「死者 - (吊い) - 私 (生者／死者) - (吊い) - 生者」と表せる。そして、ここで「(産み)」と「(吊い)」によって隔てられている関係は、その他一般の私と他

者の関係とは異なる。即ち、両者は、産みと死を隔てて、私と「私が産まれる前に生きていたもの」、私と「私が死んだ後に生きていくもの」との二元性だという意味で、時間的他者と私との関係なのである。その点において両者を重ね合わせて表記すると、「親／死者 - (産み／弔い) - 私 (子供／生者：親／死者) - (産み／弔い) - 子供／生者」となるだろう。この図式は、産みと死が、単に私たちの生の両極に対称的に存在するのではなく、産みが弔いを、弔いが産みを含んでいる様を示している。

このような認識の上で、はじめにも引いた、「産みという営みが最終的に目指すのは、この世界を引き継ぐものに「あとはよろしく」と言って死ぬことができる、ということではないか」(居永 2014, 103) という以前の筆者の記述を解釈しておきたい。そこで述べた「死ぬことができる」ということの意味は、単に「私の生を引き継ぐものがあるから安心して死ぬことができる」、ということではない。それ以前に、そもそも私を弔うもの(私の死後に生きていくもの=子供)がいなければ、私は(生物学的に死亡し、また独在的な「私」が消滅しても)優れた意味で「死ぬ=弔われる」ことができないのではないかと、ということである。死とは、単に独在的な「私」の限界点ではなく、私の死後に生きていく人々との法外な関係を弔いという形で成り立たせる契機である。そしてこの弔いという契機は、私が自らの死後に生きていくものを産むことによって始めて可能になるのである。

#### 4 いくつかの疑問点

以上で提示した産みと死の内的関連について、筆者自身にもすぐさま多くの疑問点が思い浮かぶ。最後にそれらについて検討したい。

まず何よりも、弔いと産みが関係していると言っても、現実には、私たちは自分を産んだもの以外も弔うのであり、また自分が産んだもの以外にも弔われる。さらには、自分を産んだものを弔わない場合もある。これらのケースについてはどう考えるのか。

後者の、自分を産んだものを弔わない、また自分が産んだものに弔われないという場合については、まず本論文で弔いと関連していると言う「産み」とは、あくまで狭義の産み(B)であって、単に生物学的親子関係(A)があることではない、という点を確認しておきたい。生物学的には親子関係(A)があっても、子供が成長する中で関係が疎遠になり、その親が死んでも子供が弔わないということはある。それは、そこに本論文で言う「親 - 子の法外な二元性」(B)が現れていないからである、と答えたい。Aが必然的にBを伴うわけではない。それは、Aが必然的にCを伴うわけではないのと同じである。そして、Bが成

り立っている限り、親の死を子供は弔う (b) ののである。

では前者のケース、B 以外の関係における弔いはどう考えればよいのか。例えば親友は私の親でも子でもないが、その親友が死ねば私はそれを弔う。したがって、B が成り立っていれば親の死を子供は弔うとしても、それは B が弔いの十分条件であることを示しているだけで、必要条件ではないのではないか。この疑問には今のところ十分に答えることはできない。確かに、生物学的に自らの子供を持たず、もしくは持っていて B の関係がない場合に、私が死んで親友 (などの他者) に弔われる場合 (b) があるのは事実である。筆者もそれが弔いではないとは思えない。その整合性を取るために、その親友は、私の死後に生きていくものとして一種の私の子供であり、その意味で私と親友との間に B が成り立っていたと言ってしまうことも、理論的にはできるかもしれない。しかし、それでは B を徒に普遍化するようであり、そもそも私と親友の間には、親 - 子のように時間的他者の関係 (私が産まれる前に生きていた) が内在しているわけではない (事実にそういうケースはいくらかもあるだろう)。一つの可能性としては、他者とは即ち時間的他者であるとして、時間を基礎に置いた他者の一般理論を展開することだろう。そうすれば、全ての他者関係の根本は「産み - 弔い」であると主張できるかもしれない。この疑問に対しては、さしあたり、このような回答しかできない。

次の疑問は、本論文が主張する産みと弔いの連関とは、異性愛的家族主義を含意しているのではないか、というものである。確かに、有性生殖を前提とする限り、産みは男女の間にしか成り立たないし、また、親 - 子に弔いを限定するような言説は、一種の家族主義、さらに言えば家父長制を支えるロジックなのではないか、と捉えることもできる。それには次のように答えたい。第一に、筆者にその意図は毛頭ない。第二に、筆者はむしろ、産みの哲学は、そのような生物学的本質主義や、保守的家族観に対するオルタナティブを提示できるのではないかと思う。本論文で、生物学的出生と「狭義の産み」を切り離したのもその一例である。この点に関しては、筆者の別項 (例えば、居永 (2015)) を参照して頂きたい。

また別の疑問として、Stone やそれが引いていた Cavarero も論じていた、死の恐怖についてどう考えるのか、というものがあるだろう。前節の最後で、産むことによって「死ぬことができる」ということの意味を述べた。では、それによって、死を恐れる理由や、さらには死の恐怖自体がなくなるのだろうか。つまり、私の生を引き継ぐものがあり、それが私を弔ってくれるとき、死の恐怖はなくなるのだろうか。それに対してはまず、当たり前だが、現実には死の恐怖が無くなるかどうかは人によるとしか言えない。また死を恐怖する理由につい

でも、何か一つの普遍的な理由があるとは思えないので、「死を恐怖する理由がなくなる」と一般的に主張することに意味があるとは思えない。そうではなく、本論文が提示した産みと弔いの図式と死の恐怖との関連において重要な点は、前者は不死が不可能な人間が擬制的に不死を達成するためにあるのでは決してない、ということである。言い換えれば、死の恐怖を乗り越える最善の策である不死が達成できないので、次善の策として産みと弔いによる次世代への継承と移行がある、というわけでは決してない。つまり、産み - 弔いは、それ自体で第一義的なものであり、死の恐怖を払拭するための手段ではないのである。

最後に、そもそも本論文は産みと死の関係を「論証」したのか。単に筆者の直観を述べただけではないのか、という指摘がありそうである。はじめにも述べたように、本論文は「産みという営みが最終的に目指すのは、この世界を引き継ぐものに「あとはよろしく」と言って死ぬことができる、ということではないか」という筆者の直観に基づいている。それを、産みと死の三つの次元、特に「弔い」をキーワードにして敷衍してきた。これは確かに論証ではないかもしれない。ただ、このように産みと死の関連を把握することによって、産みと死のそれぞれの哲学的理解に、新しい認識の可能性を提示できたのではないかと思う。ただ断っておきたいが、「産み」は本論文で示した弔いとの関連の図式に尽きるわけではない。産みには、性行為、妊娠、分娩という独特の身体性や性的差異の問題が存在しており、それは死や弔いとの関連からだけでは見えてこないという点には、注意をしておく必要がある。

## おわりに

死という主題に長らく取り組んできた末に産みという主題に行き着き、さらにそこから翻って死を捉えるという曲がりくねった思索の結果として、本論文は書かれた。筆者が哲学に足を踏み入れた当初は、「独在的な「私」の消滅＝死」を徹底的に追求するという姿勢であったが、そこから「産み」を経てこの「弔い」というキーワードまで辿り着き、隔世の感がある。本論文は、身体性やジェンダーなどの視点を含む「産み」の哲学の構築という大きな課題の中の一つの側面に過ぎない。しかし、産みと相反するように思われる死を、「弔い」として、産みと内在的に関連させるというアイデアを提示したことは、「産み」の哲学という構想の一つの成果である。本論文では、産みに関連する以外の「弔い」に関する先行研究は見るができなかったもので、今後、それをレビューすることが、本論文で提示した枠組みをより豊かに発展させるための一つの課題である。

## 文献一覧

Held, V. (1989). "Birth and death." *Ethics*, 362-388.

居永正宏 (2014) 「「産み」の哲学に向けて (1) 先行研究レビューと基本的な論点の素描」『現代生命哲学研究』第3号 88-108.

——— (2015) 「「産み」を哲学するとはどういうことか」『倫理学論究』vol.2, no.1, 12-26.

森岡正博 (2014) 「「産み」の概念についての哲学的考察: 生命の哲学の構築に向けて (6)」『現代生命哲学研究』第3号 109-130.

Stone, A. (2010). "Nativity and mortality: rethinking death with Cavareno." *Continental Philosophy Review*, 43(3), 353-372.

※本研究は JSPS 特別研究員奨励費 25-1743 の助成を受けたものである。